

# 琉球大学学術リポジトリ

## 高機能自閉症児における「不自然な動作」の認知・社会的背景

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター 公開日: 2008-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): high-functioning autism, clumsiness, unusual movement, self-regulation, longitudinal examination 作成者: 松島, はるか, 神園, 幸郎, Matsushima, Haruka, Kamizono, Sachiro メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/5103">http://hdl.handle.net/20.500.12000/5103</a>

## 高機能自閉症児における「不自然な動作」の 認知・社会的背景

松島 はるか 神園 幸郎

### The cognitive and social background of unusual movements in high-functioning child with autism

Haruka MATSUSHIMA\* Sachiro KAMIZONO\*\*

High-functioning children with autism often behave strangely. We examined behaviors in one high-functioning boy with autism from a developmental perspective. We analyzed his unusual behaviors taken from his mother's records, nursery nurse's records and VTR records between 0:06 and 5:10 of age. These records contained his various activities in his daily life. We found that this observed period was divided into three stages on the basis of the regulative function of his behaviors which may have similar characteristics. These stages were made up of first, the non-regulation, second, the regulation-by-others and third, the self-regulation. From the analysis of his unusual movements with the frame of these stages, his movements showed us qualitative changes linked with the developmental changes of regulative function. In the first stage (0:06-3:03 yrs), his unusual movements were not found. In the second stage (3:04-3:09 yrs), his movements were characterized by tracing the turn-takings with other people. In the final stage (3:10-5:10 yrs), they were peculiar to his intrusion into physical world from representational world. It could be pointed out that these characteristics of his unusual movements might lead to universal features among those who are high-functioning children with autism.

Key words: high-functioning autism, clumsiness, unusual movement, self-regulation, longitudinal examination

#### はじめに

近年、自閉症者自身が執筆した回顧録などで、身体感覚の認識障害や身体図式の形成不全を疑わせるような記述が随所に見受けられるようになり、自閉症状と身体の姿勢や運動・動作の障害が密接に関係している可能性が注目されるようになってきた。従来から自閉症の運動障害については、さ

まざまな指摘がなされてきている。たとえば、特異な歩行や姿勢などの大筋運動の制御欠陥 (Bond, 1986; DeMyer, 1976; Damasio, & Maurer, 1978)、プラクシス (praxis) の障害 (Ayers, 1979) に代表されるような運動・動作の企画やモニターの困難、動作模倣の欠如 (e.g., DeMyer, et al., 1972; Rogers, & Pennington, 1991)、奇妙なジェスチャー (e.g., Leary, & Hills, 1996) など、自閉症児における身体運動や動作に纏わる特異性は数多く報告されている。従来の研究は、自閉症児が現わす特異な運動・動

\*Graduate School of Education

\*\*Faculty of Education, Uni. of the Ryukyus

作の発生機序を専ら大脳生理学や神経学などを基盤として説明するものが多く、しかも運動・動作の特異性は自閉症の本態と直接に関わる現象としてではなく、どちらかといえば周辺的な現象としてみなされていた。

ところが、1990年代に入り、アスペルガー症候群と運動障害の関連性を指摘する研究 (Cox, 1991) に触発されて、自閉症児の運動障害に関する研究が一躍注目を浴びるようになった。アスペルガー症候群は運動・動作の不器用性にその特徴があるとの研究結果 (e.g., Burgoine, & Wing, 1983; Gillberg, 1989) を受けて、不器用性という行動特徴がアスペルガー症候群と高機能自閉症の鑑別診断に有効な指標となるのではないかとの観点で盛んに研究がなされた。しかしながら、アスペルガー症候群において不器用さが顕著であり鑑別診断の指標として有効であるとの当初の研究結果を追認する報告 (e.g., Burgoine, & Wing, 1983) がある一方、両者に違いは見られないとする研究結果 (e.g., Ghaziuddin, & Bulter, 1998; Manjiviona, & Prior, 1995) もあり、現在までのところ運動・動作の不器用性が両群を分ける指標として有効であるとの結論には至っていない。こうした鑑別診断をめぐる議論は、自閉症児における運動・動作の障害に注目を集め、その発生機序の解明にむけて道を開く可能性を持っていたが、これらの研究の焦点がアスペルガー症候群と高機能自閉症の鑑別診断だけに絞られていたため、自閉症の本態と運動・動作の障害の関連性についてはほとんど言及されてこなかった。

神園 (1998) は従来の自閉症児の姿勢・運動の特異性を指摘する研究が大脳生理学や神経学などの生物学的な視点だけに偏っていたことを指摘したうえで、自閉症児で問題となる姿勢・運動の特異性は大脳生理学的な機能や構造の障害だけに還元できない性質を持っており、むしろ彼らの自我の態様や意識の作用、さらには他者を含めた環境との関係で立ち現れる自己の存在様式などと密接に関係していることを強調した。こうした観点から、神園 (1998) は、従来、実験事態などの統制場面や半統制場面で取り上げられることが多かった自閉症児の姿勢・運動の特異性を、日常生活場面において現れる姿勢・運動に着目することによ

て、生活世界における現象として生態学的な観点から記述した。しかしながら、この研究の目的は自閉症幼児に見られる「ぎこちない」動作を整理し、その心的背景を記述することに主眼が置かれており、それらが発達的にどのように推移するかについては次の課題としていた。

そこで、本研究は神園 (1998) が提唱した枠組みを継承した上で、新たに発達的な視点を導入して自閉症児の運動・動作の特異性の認知・社会的な背景を描き出し、そのうえで自閉症の本態との関連を論じることを目的とした。

ところで、神園 (1998) は自閉症児が現す運動・動作それ自体の特異性に注目し、その現象を「ぎこちなさ」という用語で表現している。自閉症児の運動・動作の特異性は、運動・動作そのものの奇妙さ、ぎこちなさにあるのは確かであるが、運動・動作に問題がない場合でも、その運動・動作の出現状況や行動文脈との適合性の観点から特異性が指摘できるものもある。そこで、本研究ではそうした運動・動作も含めて広く特異な運動・動作を捕捉し、その背景を論じるために「ぎこちない動作」に換えて「不自然な動作」という語を用いることにした。また、知的障害による交絡要因を排除して自閉症の本態と運動・動作の不自然さの関連を検討しやすくするために、本研究は自閉症児全般を対象とした神園 (1998) と異なり、高機能自閉症児を対象とした。

## 方 法

### 1. 対象児

本児は199×年生まれの男児 (A) である。父35歳、母31歳のとき、第1子として、帝王切開により出生する。妊娠2ヵ月と4ヵ月時に切迫流産の徴候があったが、持ち直した。定額3ヵ月、始歩12ヵ月で運動発達上の問題はなかった。1歳の誕生日の頃には「ワンワン」などいくつかのことばが出ていた。1歳3ヵ月時には目が合わなくなり、つま先で歩くなどの特異な行動が出現しはじめた。1歳6ヵ月健診で発達上の遅れが指摘され、1歳8ヵ月時に児童相談所にて自閉性障害と診断された。この頃は母親以外の他者を寄せ付けず、他者が近づくと声を出して威嚇したり、部屋のドアを

閉めたりした。2歳2ヵ月で簡単な文章が読めるようになった。アルファベットもすぐ覚えた。2歳6ヵ月頃になると消失していた単語（りんご、みかんなど）が出はじめた。3歳を過ぎると語彙数が増加し、母親に対しては一語発話によって要求を伝達できるようになった。3歳3ヵ月時に保育所に入所し、障害児保育の該当児として処遇された。数字や文字へのこだわりは依然として強く、カレンダーや文字ブロックなどのひとり遊びが多く、他児との関わりはほとんどなかった。

以上の生育歴と、小学校入学時の田中・ビネー式知能検査の結果がIQ136であったことを考慮すると、本児はいわゆる高機能自閉症の範疇に入るものと思われる。

## 2. 手続き

本研究は、本児の、①0:06から4:07（0:06は6ヵ月、4:07は4歳7ヵ月の略：以下同様）までの、母親による手記（以下、母手記と略す）、②3:03から5:10までの障害児担当保育士による保育記録（以下、保育記録と略す）、そして、③3:05から4:11までのB保育所場面におけるVTR資料（以下、VTR資料と略す）を分析資料とした。③のVTR資料については、筆者らが1ヵ月に1回の割合でB保育所に出向き、本児の保育所生活をVTRに収録した。そして、それらのVTR資料の中から、筆者らによって本児の「不自然な動作」の出現場面が全て抽出され、DVDディスクに記録された。「不自然な動作」の抽出にあたっては、対象児の動作を2名の評定者が一致して「不自然」、「奇妙」あるいは「特異」と認識したときに、その動作を「不自然な動作」と判断した。抽出された「不自然な動作」は前後の行動文脈をも含めてエピソードとして文字に記録された。なお、抽出されたすべてのエピソードは、104場面であった。

## 3. 分析指標及び分析方法

分析は筆者ら2名によって行われた。抽出された「不自然な動作」は次に示した3つの分析指標に基づいて、それらの動作の発達的变化と認知・社会的背景が分析された。第一の指標は、「不自然な動作」の對他者性である。先にも指摘したように、「不自然な動作」は脳生理学的な機能や

構造の障害といった個人内要因だけに還元できず、他者との関係性を基盤として発生する側面を持つことが想定される。それゆえに、「不自然な動作」を他者との関係性に基づいて分析する必要がある。第二の指標は、「不自然な動作」の対象物との関連性である。「不自然な動作」が環境内の具体的な対象物との関係で生じたのか、あるいは具体的事物とは無関係に表象内事象から生じたのかという視点に基づいて分析する。そして、第三の指標は、「不自然な動作」を構成する身体の部位とその動きである。さらに、「不自然な動作」が生じた際の対象児の発話の内容も補足的な指標とする。

## 結果と考察

### 1. 本児の認知・社会的発達

自閉症児の「不自然な動作」を生成する要因として、生理学および神経学的な身体要因と認知的及び社会的な心的発達要因の2つが想定されることは、既に述べたとおりである。本研究の目的は、後者の要因に焦点をあて、自閉症児が示す「不自然な動作」の背景をなす心的発達要因を描きだすことであった。そのためには、まず自閉症児の行動に表われた認知的及び社会的な発達経過を把握することが必要になる。そこで、本児の生育歴や保育記録さらに筆者らによって収録されたVTR資料から、本児の認知・社会的発達を辿ることにした。

本児は3歳3ヵ月時に保育所に入所するが、それ以前は専ら母親との関係が中心であった。その頃は、「**他人が声をかけても遊びの中に入っても、人の顔や姿に目が行かず、人がきたのかもわからない状態**」（エピソード1, 1:03, 母親手記）であり、「**母親以外の人は全く寄せ付けず、こちらからの語りかけはほとんど無視、新しい人やモノに接すると、その人やモノの周りをぐるぐると回る**」（エピソード2, 3:00, 入所審査に関わる観察記録）というように、母親とのいわば密着の接近状態にあって、社会的相互作用はきわめて乏しかった。しかも、この時期は多動傾向が顕著であり、目的的な行動は皆無に等しかった。また、この頃の本児は失禁の自覚さえも欠落してい

るなど、日常の生活動作は全般にわたって母親の介助を必要とした。

ところが、保育所に入所して1ヵ月が過ぎる頃になると、「保育士や他児のおしゃべりを聞いて、そのまま真似ることがよくみられるようになっていく」(エピソード3, 3:04, 保育記録)との指摘にあるように、以前にはなかった反響言語が出現し、他者への志向性の兆しが見られるようになった。また、「入所当時は立ったまま着替えようとしなかったAが、5月頃から声をかけられると洋服を自分で脱ごうとする」(エピソード4, 3:05, 保育記録)など、日常生活動作においても大きな変化が出現しはじめた。

上述したように、本児の行動は保育所に入所する以前と以後では明瞭な変化を示した。家庭での母親に全面依存した生活から、日常生活動作を他者に依存し難い保育所生活へと環境が変わることによって、本児は否応なくそれまでの生活様式の変更を迫られる事態に度々遭遇することになった。その結果、保育士の指示や命令によって本児自らが行動を発動せざるを得なくなり、先に指摘したエピソードのように日常生活動作の改善がもたらされたのであろう。この時期の行動は自らの意図に基づいて発動されているのではなく、指示や命令などの他者の意図によって制御されている点特徴的である。このように見てくると、保育所入所を契機とする本児の行動の質的变化は、行動の発動を司る制御機能の有無に起因していると考えることができる。すなわち、行動の制御が全く機能していない保育所入所以前と保育士の指示や命令などの他者の意図によって行動が制御される保育所入所後である。そこで、前者を「無制御期」、後者を「他者制御期」と命名した。

かくして、本児の認知・社会的な発達にともなう、行動の制御機能が質的に変化すると仮定できる。そこで、この枠組みに基づいて、本児のその後の行動を検討した。本児は保育所に入所して半年を過ぎる頃になると日常生活動作は一通り自立するとともに、それ以外の動作においても自らの意思で行動を発動することが可能になった。『『これは何?』『なんで〇〇したらいけないの?』などの疑問や質問が多い』(エピソード5, 5:03, 保育記録)や、「他児が保育士を独占して

いると、AはCを保育士から引き離し自分が保育士に抱きつき『C、一人で遊んで!』と言う反面、保育士の指示を聞かないことが多い』(エピソード6, 5:10, 保育記録)などのエピソードから、本児はこの時期になって、制御の主体を他者から自己に引き戻し、行動の自己制御が可能になったものと推察される。

以上のことから、本児の認知・社会的発達に伴う制御機能の質的差異に基づいて、本研究で対象とした分析期間を以下に示した3つの時期に区分した。すなわち、動作の発動に制御が機能しない「無制御期」(0:06~3:03)、動作が他者の制御に依存する「他者制御期」(3:04~3:09)、そして自己の制御で動作を発動する「自己制御期」(3:10~5:10)である。これらの時期区分ごとに、「不自然な動作」の特徴とその背景を以下に記述した。

## 2. 各制御期の「不自然な動作」の特徴 無制御期 (0:06~3:03)

この時期の本児の行動を把握するには、全面的に母親の手記に頼らざるを得なかった。この手記には、本児の「不自然な動作」を直接に記述した部分は、先述した「新奇な人やモノの周りをぐるぐる回る」といった箇所だけであった。それゆえに、本児の行動記述から「不自然な動作」の有無を推測するほかはないが、運動発達自体も未熟で生活のすべてを母親の介助に依存しているこの時期には、不自然な動作が出現する可能性は薄いとみてよいかもしれない。

### 他者制御期 (3:04~3:09)

他者制御期に出現する「不自然な動作」は、制御機能に依存して出現すると思われるものとそうでないものの2種類が見出された。その出現頻度は前者が圧倒的に多く(61場面、92.4%)、後者は僅か5場面(7.6%)にすぎなかった。ちなみに、制御に依存しないと思われる「不自然な動作」は、歩行や小走りのときに左手が拳がるといった身体の左右アンバランスな動作(Fig. 1-1)や、帽子装着時に頭と帽子のツバの向きを合わせられない(Fig. 1-2)とか、椅子を片付けるときに上手く椅子を重ねられない(Fig. 1-3)などの自己の身体とモノとの関係から生じる「不自然な動作」な



Figure 1 制御に依存しない「不自然な動作」

どであった。ここでは、この時期に出現する「不自然な動作」のうち圧倒的多数を占める制御依存の「不自然な動作」について、その特徴を記述する。

他者制御期の初期、すなわち保育所入所当時には、先述したように本児の行動は保育士の直接的な指示や命令に忠実に従って発動されていた。「4月の頃は使用したおむつをトイレに捨てるの嫌がっていたが、最近では声かけをすると自分で捨てるようになっていくようになった」（エピソード7, 3:05, 保育記録）のように、本児は専ら保育士の指示に従って行動していた。この時期の本児の行動に「不自然な動作」は捕捉されなかった。このことはおそらく本児の行動のほとんどが保育士の指示によって発動されていたことに起因すると思われる。

保育所に入所して2ヵ月を過ぎる頃、本児は指示や命令によって確実に行動を発動できるようになった。すると、今度は簡単な動作であっても他者の指示や命令がないと行動に移れない、いわゆる「指示待ち」の状態が支配的になってきた。しかし、指示待ち状態でも、例えば保育士が傍にいなかったり、保育士に気づいてもらえなかったりなど、当該の指示が常にもたらされるとは限らない。そうした時でも一定の行動を余儀なくされる

事態では、本児は当該の保育士の指示や命令を自らに取り込み、それをなぞることで行動を発動するようになった。こうした事態になると、動作そのものではなく、行動の文脈に照らした時に、その不自然さが際立つような動作が出現してきた。たとえば、次に示す例がそうである。1つは、「保育園生活で保育士がAに言っている『カバン開けて！上着着て！ズボン履いて！』等の指示言語と指さしで命令され、Aは行動することを覚える。しだいにAは自分でも指さして言うようになり、行動できるようになってくる」（エピソード8, 3:05, 母親記録）である。2つは、「屋外に遊びに行くところ。Aは靴が置いてある靴箱を手のひらを上向きにして指さし（Fig. 2-1-1）、『上靴履いて』と言う。そして、教室の中にいる保育士を見る。再度Aは靴箱を見て通常の指さし（Fig. 2-1-2）をしてから靴箱に近づき、靴をつかむ」（エピソード9, 3:05, VTR記録）である。

両エピソードに共通する不自然さは、行動に先立って指さしが発現することである。一見すると、指さし自体には特に変わった特徴はみられず、それだけをみる限りにおいては何ら不自然さを感じないが、一連の動作系列として文脈的に捉えたときにその不自然さが浮かび上がってくる。では、なぜこうした不自然さが出現してくるのであろうか。その手がかりは、指さしと同時に発せられる本児の言葉にあった。本児は保育士の指示をなぞっているのである。そうすると、行動に先立つ指さしも保育士の視点から発せられた指さしをそのままなぞることで出現したものと考えることができる。その証拠に、『カバン開けて！上着着て！ズボン履いて！』や『上靴履いて』などの言葉に随伴する本児の指さしは、先に指摘したように手のひらが上向きになっており、担当保育士が本児に行動を指示する際の指さしと形態上同一であった。つまり、本児は他者視点から発せられた保育士の指示とその際に随伴する指さしを、そっくりそのままなぞることで当該の行動を発動していたのである。したがって、行動の起源が他者の側にあるという点で、やはりこの「不自然な動作」は他者制御の特徴を保持していると言えるであろう。本児は命令する他者の視点からの指さしと、当該の行動に繋がる自己の視点から発せられる（手の甲が



Figure 2 制御に依存する「不自然な動作」

上を向いた) 指さしの両視点からの指さしを前後して連続的に行っていた。そうした場面が、この時期には随所に認められた。このように、他者制御期における「不自然な動作」は、他者の指示を取り込み、それをなぞることで行動を発動させるときに顕現化するという特徴をもつことが明らかになった。

**移行段階 (3:09)**

本児は保育士の指示や命令を取り込み、それを自らなぞることで保育所における日常生活動作のうち排泄を除く生活動作を獲得した。ちょうどこの頃に、本児が示す「不自然な動作」に新たな質的転換が生じはじめた。本児は保育所入所以前からトイレに対して恐怖反応を示していたことから、他の生活動作に比べて排泄の自立が極端に遅れていた。しかし、「おしっこは出なくてもトイレに行く練習をすると、泣いて逃げる」(エピソード 10, 3:06, 保育記録) などの拒否反応を示していた本児が、この頃になると他者との間に構築され

はじめた関係性を基盤として、トイレでの排泄行動へチャレンジしはじめた。最初は、保育所入所後4ヶ月頃に母親と保育所のトイレで泣きながらではあるが初めておしっこができた。しばらくして、今度は担当の保育士と一緒に同様な排泄行動が可能となった。そして、ついには保育士の声かけで他児と一緒にトイレに入ることができるようになった。この経緯は、本児における愛着対象の広がりや物語っていると同時に、本児のトイレ恐怖がまさに愛着関係の広がりやに呼応して漸進的に改善されていく様子を表している。別府 (1994) は、自閉症児の愛着対象の形成過程を発達的に検討し、4つの段階を指摘した。その第4段階では心理的安全基地としての愛着対象が形成されると、その関係を基盤として不安・不快なことに対してもチャレンジすることができるようになることが指摘されている。まさに、本児のトイレ恐怖へのチャレンジは、別府 (1994) が指摘した第4段階の特徴を表しているといえよう。

上記のようなトイレ恐怖に対する取り組みの延長上で、他児とトイレに入ったまさにその翌日に次のエピソードに示すような自分ひとりで排泄に挑もうとする行動が出現してきた。

「その日、本児は落ち着きなく、もじもじしていた。しばらくした後、保育士に接近し、目の前でジャンプしたり、奇妙に踊ったりしてしばらく保育士の周りを動き回った。保育士は本児の様子に気づかず、全く反応を示さなかった。すると、本児は自らトイレに向かい、しばらくトイレを覗くように眺めていた (Fig. 2-2-1) が、勢いよくトイレの敷居を踏み越そうとするまさにその瞬間、立ち止まり (Fig. 2-2-2) トイレから離れた。しかし、すぐにトイレを指さして (Fig. 2-2-3) 再びトイレに向かって歩き始めたが、すぐに体の向きを変えて、すぐ隣の職員室に入り、戸棚をノックして「しっこだよ」と何度も繰り返した (Fig. 2-2-4)」(エピソード11, 3:09, VTR記録)。

本児はトイレを促す指示を保育士から引き出そうとして、以前の指示待ち行動とは異なる様々な目立つ動作を示した。しかし、保育士からの指示は得られなかったため、自らの意思で動作を起こそうとする。しかしながら、やはりトイレの恐怖には打ち勝てず、一旦あきらめる。その後、再度、勇気を奮い起こして、今度は以前の他者制御期の行動様式に立ち戻り、行動に先立ち指さしをすることでトイレに入ることを試みた。それでもやはりトイレに入ることができず、本児は保育士の指示を待つために保育士に働きかけた。その際の行動は他者制御とは異なり、自己の視点から発動された行為や言葉であった。以上のように、エピソード11のトイレ場面での「不自然な動作」は、他者制御と自己制御が相互に入り組んで混在することによって生じたことが想定される。そうだとすれば、この段階は他者制御から自己制御への移行段階として位置づけられるであろう。

#### 自己制御期 (3:10~5:10)

自己制御期になると、本児は制御の主体を他者から自己に引き戻し、自己の意図に基づいて行動を制御することができるようになった。自己の身体とモノとの関係把握不全のように制御に依存しない「不自然な動作」、例えば「キックボードの

前輪が横を向いているにも拘わらず、足で蹴って前に進ませようとする」(Fig. 1-4) などの動作が、その割合は少ないものの依然として認められた。しかし、この時期になると本児の日常生活動作は完全に自立し、それまで本児が示していた他者制御に基づく「不自然な動作」は完全に消失した。ところが、この時期になって、これまでには見られなかった新たな「不自然な動作」が出現するようになった。それらの「不自然な動作」は、日常生活動作以外のお遊戯や粘土遊びなどの設定遊びのように集団が統制される場面や非日常的な場面において顕著に出現した。次に示すエピソードがそうである。

1つは、「学芸会の発表中のことである。Aも舞台の列に並んでいるが、一人後ろを向いてきょろきょろしている。しばらくするとAは前を向いて舌を突き出し、口を大きく開閉して歌う真似をする (Fig. 2-3-1)」(エピソード12, 4:11, VTR記録) である。

このエピソードは衆目の中、ステージ上で歌をうたうという緊張を強いられる場面で、本児は身を処しかねて周りを見回し、自らが取るべき行動を把握した結果、舌出しと口の開閉という奇妙な動作に至ったことを表している。つまり、本児は自らの意図に基づいて動作を発動したものの、結果として「不自然な動作」になったものと推測できる。まさに、動作を自己制御したがために、動作そのものが不自然になったと考えられるのである。

2つは、「お面の色塗り作業中、『しろももらおつと』と離れたところで男児が話すのを聞くと、『しろももらえない、しろももらえる・・・(意味不明言語)』と前方を指さしながら眉間にしわを寄せた奇妙な顔で話す (Fig. 2-3-2)。そして普段の顔に戻り色塗りを始める」(エピソード13, 4:10, VTR記録) である。そして、3つは「お面の色塗り作業中に、Aは前に座る女児のお面を見つめる。突然、前方を指さしながら『なんかいろいろまぜてたいろ』と話す。しかし、前に座る女児は反応を示さない。続いて、Aは『色はここだな、この色は』と独りで話をしている。時折、上目遣いで誰かに示すかのようにならずにいるが、Aの周囲にいる子どもたちはAに反応していない。



Aは再び色塗りを始める。すると奇妙な顔でクレヨンを振り回し、『おーっと』『おーっと』と言い(Fig. 2-3-3)、片足を椅子の上に乗せる。しかしすぐに普段の顔に戻り何事もなかったように塗り始める」(エピソード14, 4:10, VTR記録)である。エピソード13と14に見られる「不自然な動作」は、それらの動作に対応する外的要因が存在しないことから、本児の内的活動に随伴して出現したものと推察される。これらの動作は本児の内的活動に起源を持つために、現実の行動文脈に依存しない、脱文脈化した性質を帯びていた。エピソード13とエピソード14は、前者が当該の遊びの中で交わされた言葉に触発されて内的活動が駆動したのに対して、後者は外的な触発事象が存在しないという点で異なる。しかし、こうした差異はあるにしても、いずれの場合も内的活動が駆動しはじめると本児の動作はその時点での行動文脈とは独立して出現するために、その不自然さが強調されることになる。

このように自己制御期においては、行動の主体としての自己が前面に出はじめることによって、上述した2つのタイプの「不自然な動作」が出現した。1つは、非日常的な場や状況において自らの動作を過剰に意識し、自らの行動を制御しようとするがために、結果として動作が不自然になってしまうタイプである。2つは、内的活動が脱文脈的に顕現化してしまうことによって動作が不自然になるタイプである。両タイプの出現の頻度は、後者が多く、その割合は63.6%であった。したがって、この時期に出現した内的活動に随伴する「不自然な動作」は、高機能自閉症児にみられる「不自然な動作」の本質を表している可能性がある。また、これらの「不自然な動作」は、自閉症児の奇異な行動としてしばしば指摘されてきたタイムスリップ現象やフラッシュバック現象とも密接に関係していることが推察される。それぞれのタイプの「不自然な動作」が出現する心的背景については後述する。

### 3. 「不自然な動作」の心理・社会的背景について

#### 1) 制御に依存しない「不自然な動作」

前述したように、行動の制御機能が発達に伴って質的に変化するにつれて、それぞれの制御機能

に対応した「不自然な動作」が出現した。しかし、制御に依存しない「不自然な動作」は、発達に伴う制御の時期区分に関係なく一貫して出現した。このような「不自然な動作」は、自己の身体と対象物との関係に基づいて起きている点が共通している。神園(1998)は自閉症児における姿勢・運動の「ぎこちなさ」を自閉症の本態と関連した極めて重要な現象であるとして、その心的背景を描き出している。それによれば、自閉症児の姿勢・運動の「ぎこちなさ」の背景には、認識の原点となるべき身体図式の未成立があり、自己の身体を「自己の身体」として意識できないためにさまざまな行動上の問題が生じるとしている。本研究で見出された制御に依らない「不自然な動作」は、まさに自己の身体図式の未成立に根ざした現象として捉えることができる。

山上(1999)によれば、「愛着対象が分化しはじめると、認知の場が体制化される停泊点となるのと同様に、自己の身体感覚や知覚と活動が一つの全体的な図式へと体制化されていく停泊点ともなる」ことが示唆されている。つまり、この指摘は、身体図式が他者との関係性の発達を基盤として形成されることを示している。自閉症児の模倣欠陥や視点移動の困難さに基づく様々な奇妙な動作などが発達とともに軽減または消失するという従来からしばしば指摘されている現象(e.g., Morgan, & Curter, 1989)は、まさに他者との関係性の発達を基盤とする身体図式の形成に支えられていることを物語っているとみることができる。本研究の対象期間中には本児の制御に依存しない「不自然な動作」は、一貫して出現しており変化は認められなかったが、山上(1999)らの研究から予測すると、発達に伴って今後大きな変化が出現する可能性も否定できない。いずれにしても、ここで取り上げた「不自然な動作」はその出現頻度は低いとしても、自閉症の本態と関連して出現し、少なくとも幼児期のある時期にはたびたび観察される重要な現象であるといえよう。また、この種の動作の不自然さは、従来、特にアスペルガー一症候群において指摘されてきた動作の「ぎこちなさ」といくつかの共通特性を持つことから、これらの関連性については今後、検討されるべき重要な課題になるであろう。

## 2) 制御依存の「不自然な動作」

先にも指摘したように、本研究で多く確認された「不自然な動作」は、制御機能に依存して出現してくるものであった。以下に制御依存の「不自然な動作」について、その背景を検討する。

本児に出現した「不自然な動作」は、行動の制御機能に基づく時期区分ごとにその性質を異にしていることが明らかになった。

他者制御期に出現した「不自然な動作」は、動作それ自体が不自然なものはまったく見られず、すべてが行動文脈に照らしたときに、その不自然さが浮き立つものであった。日常生活動作の獲得に関わって、他者の指示で行動できるようになる他者制御期の前期においてはまったく「不自然な動作」は出現しなかった。しかし、他者制御期の後期に見られるように他者が存在しない場面で、既に取り込まれている他者の指示を動作や言葉に出してなぞることで再現できるようになると、「不自然な動作」が数多く見られるようになった。つまり、この時期には、本児は他者の指示とそれに対応する動作の随伴性を一対としてなぞることで当該の動作を生成していた。それゆえに、本児がなぞる動作は規範となる他者の動作をモデルとしているために、その動作自体には何らの不自然さも認められなかった。ところが、動作に先行した他者視点に基づく指示言語などの行動文脈を背景としたときに、動作の不自然さが惹起されるのである。これらのことから、他者制御期における「不自然な動作」は、他者視点に基づく行動の発動というこの時期の特徴をよく反映していると言えよう。

自己制御期における「不自然な動作」には2つのタイプがあることが指摘された。1つは自らの行動を制御しようとするがために、結果として動作が不自然になってしまうタイプであった。2つは、内的活動が脱文脈的に顕現化してしまうことによって動作が不自然になるタイプであった。

タイプ1の「不自然な動作」は、発表会や運動会などの非日常的な行事の場面において出現した。自己制御期に入ると、保育士の指示を規範として自己の行動を制御できるようになるが、自己制御が成立する途上において、本児は保育士が指示する対象を認知する手がかりとして、保育士の身体

の向きや視線を有効に利用する術を獲得していたものと思われる。その証拠に、本児は常に担当の保育士が指示する際の保育士の動作や視線の方向を探る素振りを示していた。そのうち、本児は次第に当該の保育士の動作や視線に対して敏感に反応するようになるとともに、この行動スタイルは般化し、その他の保育士や大人の視線に対しても同様な反応を示すようになった。従来から、高機能自閉症児のこうした行動特性については、「誤りの信念」課題において基礎をなす心理化に依らずに人やモノや場を関連づけることで問題解決を図る戦略説 (Happe, 1994) の枠組みの中で紹介されてきた。他者の視線や身体の向きをモノや場と関連づけることで自らの行動様式を獲得した本児は、さまざまな状況でこれらの行動様式に依存するようになるであろうことは容易に推測できる。本児がこうした行動特性を持つとすれば、発表会や運動会のように自己の動作が注目を浴びるような場や状況においては、その場や状況に張り付いた特定の規範やルールを強く意識せざるを得なくなるのではないだろうか。そして、こうした一種のストレス状況でこの規範に合わせて自己の行動を制御しようとしたために動作が不自然になったのではないかと思われる。Ayres (1985) は、ある特定の文脈において意図的な運動プランを意識的に形成し、実行する能力をプラクシス (praxis) と呼び、条件づけられた運動パターンや自動的、反射的な運動パターンに必要な能力と区別している。上述したタイプ1の「不自然な動作」は、まさに意図的に動作を形成しようとする際に出現している点で、プラクシスの問題として捉えることができる。自閉症児におけるプラクシス障害については、DeMyer, et al. (1981) をはじめいくつかの研究が報告されている。DeMyer, et al. (1981) や Jones & Prior (1985) によれば、自閉症児には普遍的にプラクシス障害があり、彼らの非言語的コミュニケーションや社会的行動を妨げる基底要因となっていることが指摘されている。また、Rogers et al. (1996) は自閉症児の模倣欠陥や社会的行動の障害は彼らのプラクシス障害に起因することを指摘した。こうした研究は、自閉症児のプラクシス障害に神経学的な背景を仮定している。本児が示したタイプ1の「不自

然な動作」が神経学的な背景を持つかどうかは明言できないが、少なくともプラクシスの障害特性ときわめて類似する特徴をもつことは指摘できるであろう。

タイプ2の「不自然な動作」は、日常的な生活場面で出現した。保育所生活は基本にお遊戯や制作などの設定場面と自由遊び場面の2種類に集約される。本児の「不自然な動作」は、専ら設定場面で出現し、自由遊び場面での出現は皆無であった。しかも、出現した「不自然な動作」は現実の行動文脈から逸脱した本児の内的活動を反映したものであった。また、その内容は他者制御期にみられた他者の指示とそれに対応する動作との随伴関係を一對としてなぞる、いわば第三者的視点からのなぞりと違って、自己の視点から実在しない他者へ向けた発話、いわゆる自己内対話の様相を呈していた。

自由遊び場面は規範やルールにとらわれず、自由な意図に基づいて行動が可能となる事態である。したがって、行動制限が作用しないことによって内的・表象的な活動よりも、専ら現実場面における外的環境との関わりで行動が生起するために「不自然な動作」は出現しないのであろう。しかし、設定場面は非日常場面ほど規範やルールが厳しいわけではないが、課題要求や指示が存在する。設定場面ではそれらの指示に沿って行動することが求められるが、お遊戯会や運動会のように他者視線は存在せず、しかも課題要求や指示は集団場面であるがゆえに厳格ではなく、ある程度の自由な振る舞いが許容される。こうした事実を考慮すると、設定場面は非日常的な行事場面と自由遊び場面の中間に位置づくいわば半統制的な事態であると考えることができる。半統制場面としての設定場面では、たとえば「お面作り」や「お面の色塗り」という課題目標が設定され、目標達成に至る大まかな手順までは提示されるものの、実際の作業は本児の自由な裁量に委ねられる場合が多かった。しかし、自己の判断に依存しなければならぬ事態は、本児にある種の緊張とストレスをもたらすと同時に、自ずと表象に基づく内的活動を賦活させることになる。先に指摘した色塗り場面のエピソードを例に考えてみよう。本児は特定の色に対してこだわりを示すために、これまで色塗り

の場面で保育士から指導を受ける経験が多く、それ故にクレヨンの色選択は本児にとって緊張を強いる事態であったと思われる。その証拠に、他児のお面の色や色選択の言葉に端を発して、本児の内的活動が突然に駆動しはじめ、色選択に纏わる内的活動が活性化するのである。本児は色に関係する言葉を連発しはじめると次第に興奮した面持ちになり、そのうち突然椅子から立ち上がり、険しい表情で中空を指さして他者に命令するような言葉や口調へと変貌した。そして、直後に何事もなかったかのように色塗り作業に復帰した。こうした本児の一連の動作は、随伴することばの内容と相俟って、その不自然さを際立たせた。このように、半統制的な場面が内的活動を賦活し、それが現実場面に侵襲した結果がタイプ2の「不自然な動作」となって表出されたものと考えられる。

内的活動が言葉や動作となって表出してしまう現象は、通常の発達、とりわけ幼児期においてはたびたび見られることであり、そのこと自体は特異的ではない。幼児期初期には自己と他者が分化し、自己と他者の対話的なやり取り、すなわち自他二重的な対話が登場する。そして、自他二重的な対話経験が積み重なるにつれて、その自他二重性は次第に内化しはじめ、内的な対話構造としての自我二重性へと変貌する（浜田、1992）。自他二重性から自我二重的構造が形成されはじめる頃、いわゆる自我の芽生えとして指摘されるこの時期にたびたび目撃される行動が、ひとり語り、ひとり二役的な言葉や振りなどである。これらの行動は、まさに内的に交わされる自我二重的な対話が外的に表出されたものに他ならない。このように、内的活動が行動となって表出される現象は自我構造が形成されつつある過渡期には一般的に見られるものである。通常の発達に見られるこうした行動に比べて、本児の行動が不自然にみえる背景として次のことが指摘できる。すなわち、通常の発達に見られるひとり語りやひとり二役的な言葉や動作は、他者との関わり乏しいひとり遊び場面のような非社会的な場面において見られる（麻生、1992）のに対して、本児の行動は課題場面や設定場面などの特定の社会的な場面や文脈において突然に出現することである。社会的な場面や状況とは無関係にこれらの「不自然な動作」が出現する

のはなぜだろうか。一つの可能な見解は、社会的場面が本児にとっては社会的として機能し難いという点にあるかもしれない。本質的に自閉症児は他者との自他二重的な関係を形成し難い。こうした現実場面における他者との対話的展開の乏しさが、内的世界への傾倒と肥大化をもたらしたことが推察される。さらに、社会的関係性が表出に対する抵抗として機能しないために、内的世界の内容が現実世界の状況との関係で調整されずにそのまま表出されてしまう状態、すなわち無制御状態に陥ってしまうことによって、さまざまな動作が社会的な場面や状況と無関係に出現するようになるのではないだろうか。このように考えると、自己制御期における「不自然な動作」は、高機能自閉症児の特徴を最も良く表していると言えよう。

## 総合考察

本研究は行動の自己制御を軸に自閉症児の「不自然な動作」の心的背景を描き出した。自己制御に関する研究の系譜は、言語の行動調整についての Luria (1969) の研究にその起源を遡ることができる。彼の研究によれば、幼児期の行動は、他者の言語による制御から、自己の言語による制御へと進み、しかも外言から内言による制御へと発達的に移行していくことが明らかにされた。その後、自己制御の研究は、その対象が行動だけではなく、さまざまな要求や欲求の調整に関わる情動や感情の制御へと拡大するようになり、日常生活場面における多様な現象を対象にできるようになった (Mischel, & Mischel, 1983; 氏家, 1980; 柏木, 1988)。そして、最近の研究は自己制御を対人コミュニケーションの中で捉えようとする研究にシフトしつつある (鯨岡, 1993)。すなわち、自己制御は他者とのコミュニケーションの中で展開するものであるため、個人内機能としてのみ捉えるべきではなく、関係性動論的な視点から捉えなおす必要があるというものである。このように、Luria (1969) をはじめとする自己制御の研究は、言語の行動調整に関わる実験的な研究から日常生活場面における情動や感情の制御に関する研究、さらには自己制御の起源を対人的コミュニケーションに求める研究へと拡大してきた。こうした自己

制御の研究の系譜に照らして、以下に本研究の結果を捉えなおしてみた。

行動の自己制御に至るまでの道筋を上述のように描いたルリヤの研究は、実験事態での資料に基づくものであったが、本研究のように日常生活場面における行動の分析においても、基本的に同様な発達経過を確認することができた。ただ、本研究では他者の命令や指示をなぞることが自己の行動を発動する契機になっている時期を特に「他者制御期」と命名し、その後の「自己制御期」と区別して記述した。「他者制御期」において指摘された「不自然な動作」、すなわち他者の指示と自己の行動との随伴性をそのままなぞる動作は、既に取り込まれているパタン化した動作系列の単なる再現に過ぎなかった。そのために、こうした行動様式は日常生活動作の獲得を促し、適応性を高める反面、トイレ場面での指示待ち行動にみられるように、この随伴性に過剰に依存するため、新たな問題を惹起することにもなった。

また、自己制御が対人的コミュニケーションに依存するという点について、本研究でも同様な現象が指摘された。たとえば、他者制御期から自己制御期への移行期において、本児のトイレ恐怖は、まず母親との関係で克服され、次いで保育士、さらに他児との関係で克服された。そして、その延長上でついに自らの意思でトイレに向かおうとして葛藤状態に陥ったときに「不自然な動作」が出現した。このことは、本児が自らのトイレ恐怖を他者との関係を基盤として制御できるようになったこと、さらには自らの意思で行動に踏み込まず他者の指示にすがろうとするような制御の主体が交差するときに「不自然な動作」が生じたことを物語っている。いずれの場合も制御が対人的コミュニケーションに依存することを示唆していると言えるであろう。また、発表会や運動会などで多くの他者の注目を浴び、特定の規範やルールを意識せざるを得ないような場面において、自己の行動を意識的に制御しようとする際に「不自然な動作」が出現した。このことも、もとを正せば、行動の制御が対人的コミュニケーションの在りように依存していることを物語っている。

以上のことから、自閉症児においても制御機能は言語の行動制御に限らず、情動や感情の制御に

まで及ぶこと、さらに制御機能は他者との関係性や対人的コミュニケーションの在りように依存していることが見出された。また、自閉症児においては、制御機能が作用することによって、彼らに特有な「不自然な動作」が生成されることが明らかになった。このことは、自閉症児の「不自然な動作」の心理・社会的な背景要因を記述するうえで、行動の制御機能の発達的变化を基軸とすることの有効性を示唆している。

制御機能の発達的变化に基づく分析から、自閉症児が示す「不自然な動作」には、制御機能が関与しないものと、制御依存のものがあることが明らかになった。制御に依存しない「不自然な動作」は、発達的な時期区分に関係なく一貫して出現していた。従来は神経学的な背景のもとで論じられてきた現象と重なる特徴を持つが、本論では神園(1998)が指摘した身体図式の未成立の枠組みで解釈した。

一方、制御依存の「不自然な動作」は、制御機能の発達に伴う質的な変化によって大きく性質が異なった。他者制御期における「不自然な動作」は、他者の指示とそれに対応する動作の随伴性をなぞることで出現し、その不自然さは動作そのものではなく、動作が生起する文脈を背景にしたときに際立つものであった。これに対して、自己制御期の「不自然な動作」は、自己の意図や内的世界が前面に出るときに出現し、その不自然さは動作そのものにあることが多かった。また、自己制御期の「不自然な動作」は、規範やルールに合わせて自ら行動を制御しようとするがために結果として動作が不自然になってしまうタイプ1と、内的活動が脱文脈的に顕現化してしまうことで動作が不自然になるタイプ2の2種類が見出された。タイプ1は神経学的な背景を想定するプラクシスの障害特性と類似する性質をもつものに対して、タイプ2は自己と他者の表象、さらにはそれらに基づく社会的コミュニケーションと密接な関係をもつことが推察された。タイプ2はその出現率がタイプ1に比べて圧倒的に高く、本研究が対象とした高機能自閉症児の行動特性や問題行動を如実に表していると思われる。McNeill(1985)は発話と身振りは共通する生成の基盤を持っており、身振りは発話と同じ発達の順序性を持つことを指摘

した。「言語および非言語的なコミュニケーションの質的な障害」として指摘されている自閉症児におけるコミュニケーション障害の本質を把握する上で、タイプ2の「不自然な動作」の起源を探ることは、彼らの発話の生成機構やその基盤となる思考の特性を解明することに道を開く可能性を持つかもしれない。

## 謝 辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただいた対象児のA君とご両親に厚く御礼を申し上げます。A君の健やかな成長を祈りつつ、ここに記して感謝の意を表します。

## 付 記

本研究は文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号15530431)の助成を得た。

## 引用文献

- 麻生武(1992). 身ぶりからことばへ - 赤ちゃんにみる私たちの起源 -. 新曜社.
- Ayers, A. J. (1979). *Sensory integration and the child*. Los Angeles: Western Psychological Service.
- Ayers, A. J. (1985). *Developmental Dyspraxia and Adult Onset Apraxia*. Torrance, CA: Sensor Integration International.
- 別府哲(1994). 話し言葉をもたない自閉性障害幼児における特定の相手の形成. *教育心理学研究*, 第42巻, 第2号, 156-166.
- Bond, S. (1986). *The gait of adolescent males with autistic behaviors: A pilot study*. Unpublished Master's thesis, McMaster University School of Graduate studies (Hamilton, Ontario).
- Burgoine, E., & Wing, L. (1983). Identical triplets with Asperger's syndrome. *British Journal of Psychiatry*, 143, 261-265.
- Cox, A. D. (1991). Is Asperger's syndrome a useful diagnosis? *Archives of Disease in*

- Childhood, 66, 259-262.
- Damasio, A. R., & Maurer, R. G. (1978). A neurological model for childhood autism. *Archives of Neurology*, 35, 777-786.
- DeMyer, M. K., Alpen, C.D., Barton, S., DeMyer, W. E., Churchill, D. W., Hingtgen, J. N., Bryson, C. Q., Pontius, W., & Kimberlin, C. (1972). Imitation in autistic, early schizophrenic, and non-psychotic children. *Journal of Autism and Childhood Schizophrenia*, 2, 264-287.
- DeMyer, M.K. (1976). Motor, perceptual-motor and intellectual disabilities of autistic children. In L. Wing (Ed.), *Early childhood autism*. (2nd ed., 169-196). Oxford: Pergamon.
- DeMyer, M.K., Hingtgen, J. N., & Jackson, R. K. (1981). Infantile autism reviewed: A decade of research. *Schizophrenia Bulletin*, 7, 388-451.
- Ghaziuddin, M., & Bultner, E. (1998). Clumsiness in autism and Asperger syndrome: a further report. *Journal of Intellectual Disability Research*, 42, 1, 43-48.
- Gillberg, C. (1989). Asperger syndrome in 23 Swedish children. *Developmental Medicine and Child Neurology*, 31, 520-531.
- 浜田寿美男 (1992). 「私」というものの成り立ち. ミネルヴァ書房.
- Happe, F. G. E. (1994). Annotation: psychological theories of autism: the 'theory of mind' account and rival theories. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 35, 215-229.
- Jones, V., & Prior, M. (1985). Motor imitation abilities and neurological signs in autistic children. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 15, 37-46.
- 柏木恵子 (1988). 幼児期における「自己」の発達 - 行動の自己制御機能を中心に -. 東京大学出版会.
- 神園幸郎 (1998). 自閉症児における姿勢・運動の特性: 「ぎこちなさ」の心的背景について. *小児の精神と神経*, 第38巻, 第1号, 51-64.
- 鯨岡峻 (1993). セルフレギュレーションの萌芽. *現代のエスプリ*, 314, 自己モニタリング (心・状況の変化を読み取る) 丸野俊一 (編), 25-36.
- Leary, M., & Hills, D. (1996). Moving On: Autism and Movement Disturbance. *Mental Retardation*, 34, 1, 39-53.
- Luria, A. (1969). 松野豊・関口昇訳, 言語と精神発達. 明治図書.
- McNeill, D. (1985). So you think gestures are nonverbal? *Psychological Review*, 92, 3, 350-371.
- Manjiviona, J., & Prior, M. (1995). Comparison of Asperger syndrome and high-functioning autistic children on a test of motor impairment. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 17(3), 23-39.
- Mischel, H., & Mischel, W. (1983). The Development of Children's Knowledge of Self-control Strategies. *Child Development*, 54, 603-619.
- Morgan, S. B., Curter, P. S., Coplin, J. W., & Rodrigue, J. R. (1989). Do autistic children differ from retarded and normal children in Piagetian sensorimotor functioning? *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 30, 857-864.
- Rogers, S. J., Benetto, L., Mcvoy, R., & Pennington, B. F. (1996). Imitation and Pantomime in high functioning adolescents with autism spectrum disorders. *Child Development*, 67, 2060-2073.
- Rogers, S. J., & Pennington, B. F. (1991). A theoretical approach to the deficits in infantile autism spectrum disorders. *Child Development*, 67, 2060-2073.
- 氏家達夫 (1980). 誘惑に対する抵抗に及ぼす統制方略の効果の発達の検討. *教育心理学研究*,

第28巻, 第4号, 20-28.

山上雅子 (1999). 自閉症児の初期発達 —発達  
臨床的理解と援助—. ミネルヴァ書房.